

# 補陀落浄土について

和歌山県那智勝浦町立太田中学校

## 越水 暢之

### 1、はじめに

私の住む、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町天満は熊野灘に面した那智川沿いにある。

いつも、私は、自分の住所名の字数の多いのに抵抗を感じていたが、最近、やっと誇りうる地名であることに気づいた。地名、それは「和歌山」や「天満」は大方の人が知つてと思うが、「熊野」や「牟婁」や「那智」などについては、よく人々にその意味を聞かれはしたが、今まで何一つ答えられることはなかった。また、今まで誰も教えてくれなかった。

古くは、この地方は熊野の国と言われた。その後、木の国と言われるようになったが、なぜ熊野なのか説明できない。熊が住んでいたことは想像できたとしても、野らしい野はこの山国に存在しないではないかと考えたりもした。

牟婁とは何なのか、どんな意味があるのか。また、「那智」と呼ばれる地名は日本国中どこにもないそうだ。「那智」とはいったい何なのか、なぜ那智なのか、今でも答えることができない。

考えてみれば、熊野・牟婁・那智などは、なんと不可解な地名であろうか。これらはすべて日本人の生活の中から出たのではなく、仏教語か、もしくは外来語でなくては解釈でき

ないのであるかと思えるようになった。私の住んでいる地域は、熊野文化圏とでも言おうか、今では無意味な過去の文化の上に存在し、また、忘れ去られた文化の上に、ただ発音だけが漢字に当てはめられて残ったのではないかと考えるようになった。

### 2、ふだらく

「ふだらくや 岸つつ波は 三熊野の  
那智のお山に ひびく滝つせ」

花山法皇の作だと言われるが、西国三十三番札所、第一番の那智山青岸渡寺のご詠歌である。当地方では、故人のために、西国三十三番のご詠歌（念仏）を奉じて通夜を営む。西国三十三ヶ所とは、この那智山から始まり、和歌山県の北部から、大阪の泉南・河内を経て、大和、京都、近江、丹波、摂津、播磨、丹後、最後は美濃の谷汲で終わる。

「ふだらく」とはサンスクリット語（インド古語、梵語）のポタアラ、またはポタラカとも呼ばれる漢字の当て字であることが知られる。その漢字の当て字は地方により次のように書かれる。補陀落・補陀洛・補陀落迦・宝陀羅・普陀落、そして二荒などである。

関ヶ原の戦いに勝ち、全国を支配した当時の権力者徳川家康は、なぜ日光に自分の永眠の地を定めたのか、と考えてみると、滝があり二荒と呼ばれていた地が一番適当だと考えた。二荒の地は家康の死後を託するに値する地ではなくてはならないことは当然である。孫の家光は遺言にしたがって墓地を築いたが、二荒では都合が悪かったのだろうか、日光と変えてしまった。

サンスクリットのポタアラとは、訳すると極楽浄土という意味だそうだ。家康は極楽浄土の地に自分の永遠の安眠の場所を定めたと言えば私なりに理解できる。

### 3、熊野信仰

熊野は補陀落の地、極楽浄土の地、故に古代からの熊野詣  
 が続いたと言える。「熊野は偉大な未知である」と言われる  
 何故熊野なのか、意味不鮮なところが多い。中大兄皇子に追  
 われ熊野に逃れる途中、命を落とした有馬皇子が、なぜ熊野  
 へ逃れようとしたのか不明である。また壬申の乱の大海人皇  
 子が、なぜ、「吉野」を反攻の拠点に選んだか誰にも明確に  
 答えられないが、私は熊野の勢力を信じてこそ理解すること  
 ができると思う。吉野川は紀の川に通じ、背後は険しいが吉  
 野川の上流が熊野川に接していることを知っていたにちが  
 い。

平安の頃の熊野については述べないが、「蟻の熊野詣で」は、  
 京都から三百五十キロの、しかも険しい山道を経て熊野へ来  
 たという。その価値は何なのか。深い信仰心で来たことは分  
 かる。いったいそれだけだろうか。もっと他にも熊野のすば  
 らしい何かが存在したのだろうか。私にはどうもそのように  
 思えてならない。

### 4、修験道と観音信仰

密教は、深山や滝を重要な聖地とあがめ、山岳仏教を開花  
 させた。

平安以後の熊野は、山岳仏教の聖地でもあり、修験者（山  
 伏）の紀伊山地を縦貫する修行が始まる。その山々を大峯と  
 呼んでいるが、熊野は、三山の額に掲げているように「日本  
 第一大霊験所・根本熊野三所権現」であることに変わりがな  
 い。

『修験道秘記』によれば日本国中、七高山、四十八ヶ山と  
 あり、前者は、大和の大峯や富士、立山、羽黒などを記して  
 いる。後者は第一紀伊の国那智山大権現より、第四十八陸奥  
 国宇僧山大権現に終わっている。

したがって、那智は修験道においても最も重要な位置をし  
 める。

また、仏像の中でも庶民にとって身近な願いを念じるのは、  
 観音信仰である。前述のように那智山は、観音巡礼の中でも、  
 第一番札所であり、最重視されたことは知られる。

### 5、ふだらく渡海

有漏よりも無漏に入りぬる道ならば

是や御国の御本となるべき——後白河

前述したサンスクリットの語を借りると、有漏は、不浄な  
 る有形無形のものが限りなく流れる地上の世界を意味し、そ  
 れら煩惱の流れ去った真に美しい地を無漏と呼んだ。人々は、  
 神仏の合する山岳曼荼羅の地熊野権現に「宝前に詣でて涙禁  
 じ難し」（明月記）の感激を表したのであろう。まさに、西  
 方なる補陀落浄土へ渡海する願望が見える。ふだらく渡海と  
 は那智の浜より小舟に乗って、西方の極楽浄土へ船出するこ  
 とである。「渡海は平安末期より江戸中期まで約二十回、一  
 人の時もあるが、最多数は十八名、若年渡海の最少は十八歳」  
 と、記録は伝えてい  
 る。

私の住む、那智の  
 里は、熊野・牟婁  
 那智の意味がたとえ  
 はつきりしなくても、  
 まさに真なるもの、  
 美なるものの極点、  
 現世の極楽浄土、理  
 想世界と仰がれた地  
 域であることを、皆  
 さんに伝えたい。



●那智山宮曼荼羅の渡海の場合

●注1  
 牟婁郡は四郡あり、東西二郡は和歌  
 山県に南北二郡は三重県にそれぞれ  
 属する。

●注2  
 那智山青岸渡寺の高木住職から、古  
 代中国のお経の中に「あだち経」  
 という経典があることを聞いた。

●注3  
 もうその頃、フタアラーと呼ばれず、  
 ニコウと呼ばれていたのかもしれない。

●注4  
 無漏＝ムロ（牟婁とも書く）

●注5  
 八六八〜一七二二年まで